



入所施設におけるTEACCHプログラム導入の実際： 第二おしま学園における実践

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学教育学部旭川校特殊教育特別専攻科障害 児教育研究室 公開日: 2017-07-26 キーワード: 作成者: 寺尾, 孝士, 大場, 公孝 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.32150/00007934 |

入所施設におけるTEACCHプログラム導入の実際 第二おしま学園における実践

寺尾 孝士* 大場 公孝**

本施設は、第二種自閉症児施設であることから入所児は全て自閉性障害を有している。知的にも重く入所児全てがIQ35以下の重度のレベルであり、入所時点では行動障害を示していた。彼らに対して療育を展開していったのであるが、限られた職員数で対応していくには限界があり、処遇方法の見直しが必要となった。そこで、我々はTEACCHプログラムを導入し療育に取り組んでいくことにした。生活場面や作業場면을物理的に構造化し、スケジュールシステムやワークシステムを応用し、できるだけ他人に依存しないで、自立して生活していけるようにしていった。

我々職員側の未熟さや入所児の障害状況による問題点も残っているが、構造化のアイデアを応用した取り組みは、彼らの多くが混乱することなく自立して行動できるようになったことで、その有効性が確認できた。

(キーワード：自閉性障害 行動障害 TEACCHプログラム 自立)

1. はじめに

第二おしま学園は、1978年に開設した自閉性障害をもつ児童を対象とした定員40名の入所施設である。1993年には強度行動障害特別処遇事業を開始した。本事業は、極めて激しい行動障害を示しているものを対象としており定員は4名である。

本施設は特別処遇事業を開始する前から年々入所してくる自閉症児は、知的遅れも重度のレベルでさらに行動障害が激しいものばかりで、療育に困難さが増していった。それまでの方法ではなかなか対応できず療育の取り組みに苦慮していたところであるが、1989年1月、東京においてノースカロライナ州からTEACCH部のスタッフが来日し現任訓練が行われた際に、本施設

の職員が参加してから徐々にTEACCHプログラムのアイデアを取り入れていくことになった。

導入当初は、対象児の障害特性や機能レベルの把握が不十分であったり、職員の未熟さにより適切さを欠いた構造化となりかえって混乱させてしまうことが多かった。しかし、実践を積み上げていくに従い成果も見られるようになった。

本報告では、本施設の実践内容の紹介と事例を通して入所施設における構造化のアイデアの有効性を考察する。

2. 第二おしま学園の取り組み

(1) 入所児の状況

入所児は、全て知的障害を合併している自閉症の人達である。知的遅れの程度は全てが重度・最重度のレベルであり、行動障害を示しているものが多いことから、退所後の行き先の問題があり年齢超過の傾向がある。

入所児の状況は、表1～2に示す通りである。

* おしまコロニー第二おしま学園(星ヶ丘寮)

** おしまコロニー地域療育センター

本研究は平成7年度文部省科学研究費一般研究(B)(課題番号07451058)の助成を受けた。

表1. 入所児の知的能力(平成7年7月現在)

| | 測定不能 | ～19 | ～35 | 合計 |
|---|------|-----|-----|----|
| 男 | 8 | 15 | 14 | 37 |
| 女 | 0 | 5 | 2 | 7 |
| 計 | 8 | 20 | 16 | 44 |

表2. 入所児の年齢(平成7年7月現在)

| | 12-14 | 15-17 | 18-19 | 20-24 | 合計 |
|---|-------|-------|-------|-------|----|
| 男 | 1 | 7 | 4 | 25 | 37 |
| 女 | | 1 | 2 | 4 | 7 |
| 計 | 1 | 8 | 6 | 29 | 44 |

(2) 第二おしま学園の療育システム

1) 個別目標の設定

入所児一人一人について、障害特性や機能レベルに応じて長期目標を決め、その目標を行動分析し、一つ一つの行動項目の達成度を評価し、短期目標を決める。例えば表3のように決められる。『合格』は他人に依存しないで一人でできるレベルであり、『芽生え』は自分で行うが間違ったり途中まで行うが最後まではできない等のレベルである。

個別目標は、入所児個々の発達の適切性、機能性、自立性の視点から、内容は身近処理に関したものの、家事行動に関したものの、余暇活動に関したもの等多岐にわたっている。また、作業活動に参加している場合も同じように個別目標が設定される。

2) 物理的構造化

生活場面においては、食事をする場所は食堂、課題を行う場所はホールというように、一つの場所を多目的に使用しないようにしている。ま

表3. O. T. の個別目標の例

| 年間目標 | 髭剃りをする | | |
|----------|--|-----|------|
| 目標行動 | 行動項目 | 達成度 | 達成期間 |
| | ①用具の準備をする | 合格 | |
| | ②シェーバーのスイッチを入れる | 合格 | |
| | ③絵カードに示されたことに従い剃る | 合格 | |
| | ④部位に合わせた剃り方ができる | 芽生え | 1カ月 |
| | ⑤絵カードの手順に従って剃る | 芽生え | 1カ月 |
| | ⑥10カウントにてシェーバーを動かす | 合格 | |
| | ⑦カセットテープにあわせて剃る (10カウントが録音されている) | 芽生え | 1カ月 |
| | ⑧シェーバーを充電する | 芽生え | 1カ月 |
| ⑨用具を片付ける | 合格 | | |
| 設定理由及び方法 | <p>シェーバーの操作はできるものの、どの部位にどれくらいといったことが具体的に分からずにいる。</p> <p>方法として、絵カードを使用して、シェーバーを当てる部位を色別にして示し10カウントを数えることで、剃る部位と時間的長さを知らせていく。また、部位一カ所につき一枚のカードを使用し、一枚ずつめくっていくことで手順を理解させていく。</p> <p>シェーバーの管理については使用後に充電することのみに止め、今年度は髭を剃る行動の自立に焦点をあてる。</p> <p>最終的には、絵カードとカセットテープにより一人で自立して髭剃りができるようにする。</p> | | |

た、課題を行う場合、注意といったことに問題

を示す入所児の場合は、余分な刺激を排除する

ためについたてを立てたり、壁側に向かって行うようにしたり、個室で行う等の配慮をしている。

掃除をする場所も、床に色ビニールテープで区切られており、どこからどこまで掃いたり拭いたりすればよいか分かるように示されている。ゴミを集める場所も色ビニールテープで小さな四角を作り示されている。

自分の洗面道具、課題用具等の置く場所も決められた棚や、色別のバスケット等で、明確に視覚的に分かるように配慮されている。

セルフ・コントロールできないで混乱したり不安に陥って興奮している時等、外部からの刺激が少なく、リラックスできる場所として、一人一人に応じたカームダウン・エリアを設けた。

作業場面においても、個々の障害特性や機能レベルに応じて、机の位置やついたて、座る場所等が配慮されており、集中して仕事ができるようになっている。

3) スケジュールシステム

生活場面、作業場面とも「いつ」「何を」「どこに」等をスケジュールシステムで示している。スケジュールの内容については、個々の理解のレベルに合わせて、絵、文字、写真や具体物で示すようにしている。スケジュールの量も一日全部、一日の部分、一つの内容のみというように配慮されている。自閉症の人達の場合、一つの活動から次の活動に移行する時、非常に混乱することがあるため、スケジュールの提示場所は、決められた場所（トランジション・エリア）で示すようにした。

4) ワーク・システム

生活場面における課題（身辺処理、家事、余暇活動）や作業場面において、『何をするのか』『どのくらいの時間ないし量を行うのか』『いつ作業が終了するのか』『終わった後どうするのか』等を、絵、文字、写真等で示すようにし、一人で自立して取り組めるようにした。

個別化したワーク・システムとして①左から右のシステム、②色あわせのシステム、③シン

ボルによるシステム、④文字によるシステムの4種類のシステムを入所児一人一人の課題遂行レベルを考慮して用いるようにした。

5) タスク・オーガナイゼーション

a) コンテキストの提示

言語による指示のみでは入所児が何をしたいのか分からない場合がある。そのような時には、それを行う場面や前後関係を示したり、使用する用具を見せて何を行うのかを具体的に分からせるようにした。

b) 一対一の対応

例えば食事当番をする時に、食器の数が数えられなくても、必要人数分の食器カードの上に食器を並べていけばその役割活動が達成できるようにする。また、買い物をした時にお金のこと分からない場合、その物の絵と同時に金額分のお金の写真が示してあり、それとマッチさせてお金を用意すれば一人で買い物ができるようにする。このように一対一の対応により、同じということや数的な処理の理解が非常に困難な重度の人達に対しても、一人で課題を遂行できるように配慮した。

c) 左から右の系列

課題をいつも左から右に進めていくことで、習慣的に課題遂行手順を分かるように配慮した。

d) ジグの利用

身辺処理、家事、余暇活動や作業等を行う場合、絵や図や文字を単独、または組み合わせて用いてそのやり方を示していくようにした。ジグを作成する時は、入所児の理解の程度（何でどのように示されると理解できるか）と課題分析を行っていくようにした。

(3) 事例

1) プロフィール

氏名：G. Y. 性別：男

生年月日：昭和48年12月11日生まれ

家族状況：父親は糖尿病のため入退院を繰り返している。そのため母親が事業を代わって行っている。母親の仕事の関係で帰

省なども仕事の都合を見て行っている。妹は、将来施設の職員として働きたいという意志を持ち、度々来園し本ケースとかかわるなど協力してくれている。

母方祖母と父方祖母が同居していたが、現在母方祖母は入院中である。

障害：自閉性障害 精神発達遅滞重度

知能指数：鈴木ビネー式知能検査測定不能

言語表出：有意味語はまったくない。「ウィーウィー」や「アイアイ」という音声を中心である。その音声と手を合わせたり口や腹などの部位をたたくジェスチャーを交えて、コミュニケーションを図ろうとする。

コミュニケーション機能は、要求と拒否だけである。要求は、食べ物、ドライブ、トイレに行く時に限定されている。拒否の仕方は、大声をあげたり他傷したりする。

言語理解：文脈がない状況での言語理解はできない。手掛かりとして、実物または文脈を言語と同時に提示しなければならない。プロンプトのレベルは、身振りや絵でも可能である。

○本ケースにおける行動障害の状況

他傷：相手の手をあごに強くこすりつける、噛み付く、爪を立てるなど

自傷：髪の毛を抜く、手を強く自分のあごにあてる

こだわり：頭髮などに唾液を塗り付ける、照明器具のスイッチをいじる、物の位置を気にする、特定の衣類しか身につけようとしないなど

物壊し：衣類を破る、カセットを壊す、壁紙や雑誌類を破くなど

睡眠障害：一晩に何度も起き出す、奇声を出し続けるなど

排泄関係の障害：場所を変えて放尿する

多動：全ての電灯をつけて回るとか消して回ることを、繰り返すなどして動き回る

騒がしさ：跳びはねる、奇声を発するなど

以上示した行動は、不安定な状態になり興奮を示すようになると頻回に出現し、粗暴さが増してきていた。興奮は持続的に数日間続き、粗暴さが強まり周囲に恐怖感を与えるほどであった。そのような状況になると、時として男性職員でも一人では制止することが容易ではなかった。

2) 生育歴

出生時父親25歳、母親38歳であった。妊娠33週で早期破水、出生時体重1,650g、1カ月ほど保育器を使用した。その後の身体的な発達はほぼ正常であった。

首のすわり3カ月、はいはい8カ月、ひとり立ち11カ月、ひとり歩き12カ月であった。

言語は12カ月より見られていたが、24カ月を過ぎるころには消失した。それ以後、言語発達遅滞の症状を主訴とした療育活動が行われた。神奈川県立こども医療センターをはじめ、3歳時には聖マリアンナ医科大学病院『言葉の教室』に通う。愛情をかけていくことで、発達していくであろうとの助言を得ていた。この時期の主たる養育者は、母親が就労していたこともあり、母方祖母が中心となっていた。

4歳時より武蔵野東学園幼稚園へ通園開始した。就学猶予1年後同学園小学部に入学したが、通学距離が遠いため横浜市中区聖坂養護学校へ転校し、中学部卒業まで在籍している。小学校へ入学するころには、母親は仕事を辞め、かわりを積極的にもつようになった。

平成2年に中学部卒業後本園に入所する。

3) 本ケースに対する取り組み

◎平成2年度～5年度

・入所当初は、一日中しかも毎日のように何らかの行動障害が繰り返されていたことで、どうしてもその行動のみに対して、注意や制止によって生起させないようにするという方法をとっていた。その結果、その場での行動を抑制する効果があったが、職員のすきをうかがったり、職員がすぐに制止できない離れた場所で行うよ

うになった。

・施設での生活や作業，高等部に進学するなどの環境の変化が混乱させる原因になっていたが，時間の経過とともに環境に慣れてくることで，何らかの活動をしていたり，安定している期間であれば，行動障害が若干ではあるが軽減してきた。

・平成5年度より，余暇時間の過ごし方に取り組んだ。その結果，明らかに行動障害の軽減が見られた。

そこで，表面化している行動だけに振り回されず，なぜそのような行動をとらざるを得なかったのかを，ケースの側に立って考察した。そうすることで，混乱や不安，生理的な問題（睡眠，便秘，健康状態等）などの改善が必要であり，この改善が不安定期間の短縮につながっていくことが確認されたため，このことを指導を展開していくうえでの基本的な押さえとした。

◎平成6年度～7年度

以上述べてきたことから，次に示すように機能レベルや自閉症の特性にあわせて働きかけを展開していった。

①基本的な生活面における指導の展開について

- a. 機能レベルに合わせ，現状の身につけている生活上のスキルを基盤として組み立てていくようにした。
- b. カウントを数えたり，「終わり」と声をかけたり，キッチンタイマーの音でいつ終わるのかをはっきりと伝えるようにした。終了後はよくできたことをほめるようにした。
- c. 自他の区別ができないことで，物の位置を並べ替えたりすることが多かったため，カラーテープを貼ったり，専用の棚を用意して，本人の物や置く場所を明瞭に示していくようにした。
- d. タオルケットをたたんだりする時に，角を持つように声をかけたり，指さしでは伝わらないため，タオルケットの角に紐を輪にして縫いつけて，それと同じように輪に

した紐と言葉を同時に提示してたたませるようにした。

- e. 洗面タオルを干す時は，タオルを袋状に縫い，その部分をタオル干しに通せばよいようにした。
- f. シャンプーやボディソープの量を伝える方法として，ポンプ式のものを使用し，5カウントを数えさせるようにした。

②課題場面並びに作業場面での指導の展開について

本ケースの場合，日課での先の見通しが持てないことや，今何をなすべきかが理解できなかつたり，混乱したばかりにそれ以後も混乱し続けてしまうという特性があった。また，周囲の状況に気をとられてしまったり，何をなすべきか十分理解できず，自分に期待されていることが分からなくなっていた。

そこで，図1～4に示したように，物理的構造化，色によるワークシステム，絵カードによるスケジュールシステムにより，生活場面，作業場面の双方で取り組んでいくようにした。

- a. 物理的構造化は，場所と活動を一対一で対応させるようにし，同じ場所をできるだけ多目的に使わないようにした。また，周囲の人の動きに影響されてしまうことを防ぐために，課題活動はベニヤ板の壁で区切られた個室で行わせるようにした。
- b. ワークシステムは，色カードを使用し，カードをカラーボックスのある場所へ持っていき，同じ色カードで示されたカゴとマッチングさせて活動に取り組んでいくようにさせた。

本ケースの場合，複数の量を同時に示すと混乱してしまうため，カードを重ねておき一つずつ提示する方式をとった。

- c. 課題を設定している場所に終了した課題をしまうと，混乱してしまったり，課題の順番を入れ替えてさらに混乱してしまうと

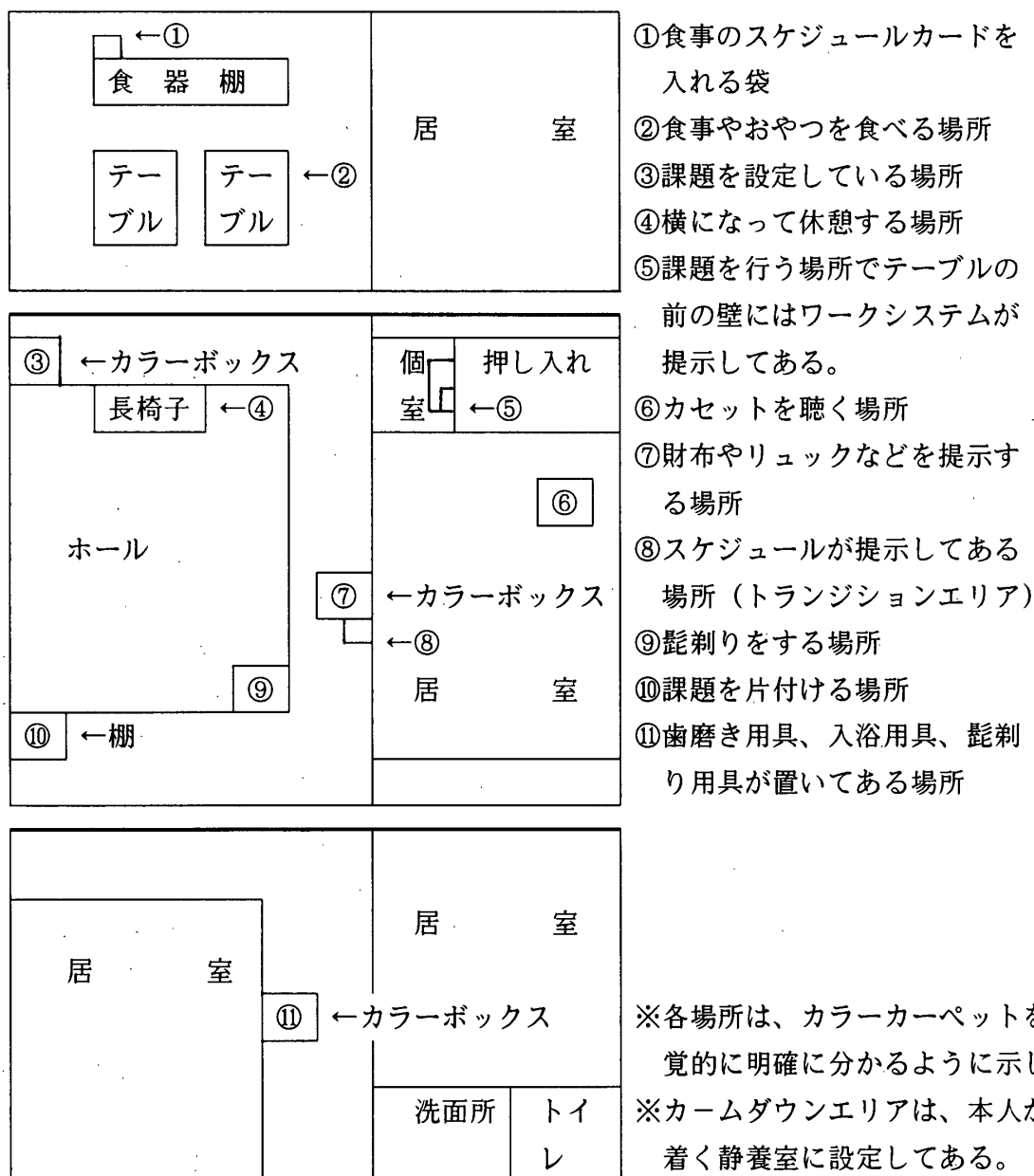


図1. 生活場面における構造化

ということがあったため、終了したものを置く場所を別に設定し、終了を明確に分らせるようにした。

d. スケジュールは絵カードを利用し、ワークシステムと同じように重ねておき一つずつの内容を提示するようにした。

e. カードを破ってしまうという行動に対しては、ビニールカバーをかけることやパウチカードを使用することで防ぐようにした。

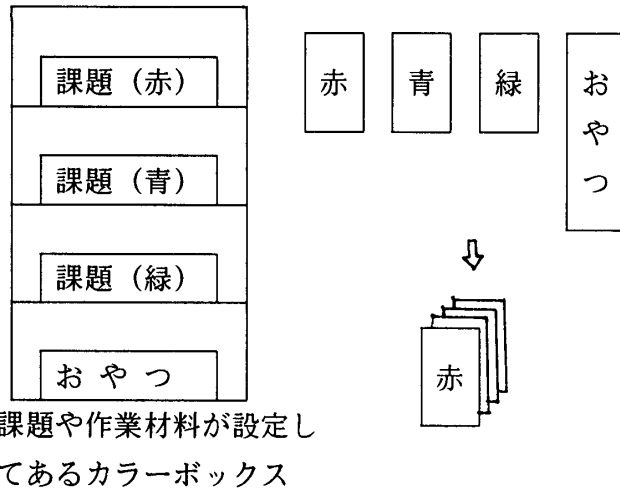
③自由時間や余暇時間の過ごし方について

a. 自由時間は、個室で課題を行うという構

造化した環境で過ごさせるようにした。何を、どのくらい行うのかはワークシステムで示した。内容はボルトとナットの組み立てやビーズ通しなどが中心となっており、材料は堅くて壊れにくいものを使用した。

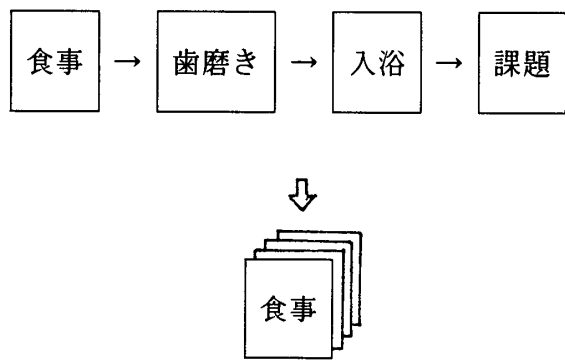
b. 手をたたいたり、跳びはねるという行動は、場所と時間を決めて許容した（主に、カセットを聴いている時、フリータイム場面等）。

c. 静かにリラックスして過ごさせるようにするため、最も関心の強いカセットを居室



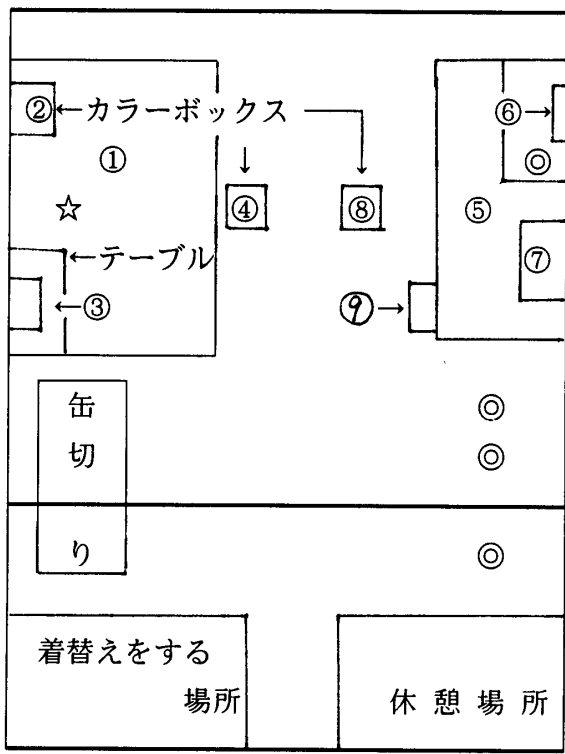
- a. 本ワークシステムは色合わせのシステムである。
- b. 色カードにはパンチで穴があけてあり、重ねてフックにかけてある。
- c. カードは破れないようにビニールカバーがかけてある。

図2. 課題及び作業のワークシステム



- a. 本スケジュールシステムは、絵で示されている。
- b. 絵カードにはパンチで穴があけてあり、重ねてフックにかけてある。
- c. カードは破れないようにパウチカードの中に入れてある。

図3. 生活場面のスケジュールシステムの例



- ①缶切りを行う場所
周囲の刺激に邪魔されないように、ついでで区切られている。
- ②切りを終えた材料を片付ける場所
- ③缶切り作業のワークシステム
色合わせのシステム (図2)
缶切り機で缶の上下の蓋を切り取る。
- ④缶切りの材料を設定している場所
- ⑤缶潰しを行う場所
周囲の刺激に邪魔されないように、ついでで区切られている。
- ⑥缶潰し作業のワークシステム
色合わせのシステム (図2)
缶潰し機で缶を潰す作業
- ⑦潰し終えた缶を片付ける場所
- ⑧缶潰しの材料を設定している場所
- ⑨スケジュールを提示している場所

☆：切り取った缶蓋を入れる箱 ◎：缶潰し機

図4. 作業場面の構造化

- で聴いて余暇を過ごさせる時間も設定した。
- d. 運動や作業をした後や余暇活動等の合間に待つ時間を作り、長椅子で横になって過ごさせるようにした。これは、体を動かした後の興奮を静めるためや、本ケースは疲れやすい傾向があること、座位だと跳びはねにつながる可能性があるためである。また、待ち時間の終わりを理解させるために、キッチンタイマーを利用した。
- e. 皮膚刺激を好んでいたため、身体を掻いてやったり、プラスチックの定規を利用して手のひらを刺激することで、安定につなげていくようにすることも行った。
- ④行動障害そのものへの対応について
- a. 夜中でも照明器具のスイッチを入れるため、スイッチにはカバーをつけた。夜中にテーブルを移動させることについても、固定して動かさないようにした。
- b. 戸を開閉することについては、クギを打ち付けて開閉できないようにした。
- c. 衣類に関して、できるだけ本人の好んでいる衣類を身につけさせるようにした。しかし、衣類が本人の目につくところがあると気にしてしまうため職員が管理するようにした。（このようなこだわり行動に対して、言葉で制止すると混乱や興奮につながっていったため、a～cに示したように物理的にできない状況を設定していくようにした）
- d. パンツをはかずにパジャマだけで寝ることは認めた。
- e. 放尿に関しては、定時排泄を行うこと、混乱を減少させること、窓枠や窓の下にあるヒーターにベニヤ板を張り付け、物理的にしてはいけないことを分からせるようにした。
- f. 興奮することに関しては、カムダウンエリアを設けそこで落ち着かせるようにした（このことで、落ち着くまでの時間はとても短くなった）。

g. 他傷することに関しては、本ケースが向かってきたら離れる→名前を呼ばれると反応することができるようになる→カムダウンエリアへ移動させる→移動する間は職員は一定の距離を保ち誘導する、という方法で対応していくようにした。

⑤職員とのかかわり及びコミュニケーションについて

- a. 本ケースは、皮膚刺激を好んでいることから、顔や手のひらを職員がマッサージしていくようにした。しかし、不安定な時には、近くにいることがかえって他傷の対象になることから行わないようにした。
- b. 一週間に一回、車に乗って好きなお菓子とジュースを買いに出掛けるようにした。
- c. トイレ（排尿時はズボンのオチンチンの部分をたたいて「アイアイ」、排便時は下腹部をたたいて「アイアイ」と訴えられるようにした。このような訴え方が身につけていなかった時は、全てズボンの前をたたいていたため、職員の対応がちぐはぐになり行動障害につながっていた）や食べ方（親指と人差し指でVサインを作りあごを押さえて「アイアイ」）、入浴（周囲の入所者が入浴の準備をしている文脈において、洗面器、タオル、石鹸等を自分で準備して「アイアイ」）の要求に対しては、速やかに応じるようにした。
- d. 制止する時は名前を呼び、指さして今行うべき行動に誘導するようにし、「だめ」のみを伝えるようなことはしなかった。
- ⑥帰省を含めた家族との関係について
- a. 協力者として妹の存在があり、時々来園してもらった。
- b. 帰省に関しては、母親の仕事の関係もあることから、他の入所児の帰省日に母親に来園してもらいその日一日過ごした後、仕事の都合がついた時に再度来園してもらい、帰省を実施していくようにした。
- c. 都合がつく限り行事に参加してもらって

いるが、以前のように頻繁に来園することはない。

⑦生理的欲求や健康状態について

- a. 特に不安定な時は、食事量が一定しない。食事をとりたがらない時は、野菜や果物を好んでいるため、そういったものを食べさせるようにした。また、食べないことで、おなかすいてしまったりしていることに関しては、適当な時間にお菓子や紅茶を与えるようにした。
- b. 排便に関しては、便秘がちなため服薬と定時排泄をさせていくようにした。
- c. 睡眠障害に関しては、混乱が減少してきたことで若干改善してきた。最終的には、睡眠剤（ベンザリン5mg/1錠）を服用することで、一定した睡眠量を得ることができ、その時間に発生していた行動障害を改善することができた。
- d. 風邪を引きやすくゼンソク症状も持っていることから、服薬している。

⑧生活のリズムについて

毎日のスケジュールを決めて、作業や余暇、散歩やマラソンという運動、休憩などを、動→静→動のプログラムを組み進めている。

例えば、平日の午前中のスケジュールは次のようになっている。

6:00起床→洗面→課題→マラソン→休憩→7:00朝食→髭剃り→カセット→作業→休憩→おやつ→課題→カセット→12:00昼食

(4) 結果

本ケースの場合、様々な場面つまずき、混乱を示し不安な感情が高まっている時に、周囲の人達にその気持ちを伝える手段を持っておらず、行動障害という歪んだ形で表現せざるを得ないという悪循環が、長年にわたって繰り返されてきたと考えられる。そこで、評価と観察を行い、本ケースの障害特性と機能レベル並びに個性を把握し、本ケースが理解できる方法でアプローチしたことにより、生活面や作業面で

きることが増えたり、それまで示していた行動障害の大部分は以下に示すように軽減した。

①基本的な生活習慣に関する多くのスキルを獲得した。また、援助する部分を職員間で統一したことで、例えば歯磨きなどの苦手なことを行う時間に発生していた行動障害が改善した。

②余暇時間にカセットを聴いたり、課題に取り組めるようになった。自由時間や余暇時間に、何をすることが理解でき一人で取り組めるようになったことで、この時間帯に示していた行動障害が減少した。

③TEACCHプログラムのアイデアを利用したことで、日課の理解や余暇の過ごし方、身辺処理の仕方などを獲得し、様々な状況で混乱することも減少した。

④作業プログラムも構造化することで、作業中に示していた行動障害も減少した。

⑤興奮が落ち着きかけた時に、皮膚刺激を与えるようにしたことで、安定へ向かうことが早まった。

⑥職員の対応に一貫性を持たせたことや、カムダウンエリアを利用したことで、職員に対する他傷が減少した。

⑦職員とコミュニケーションがとれるようになるに従い、トイレに行く時には、排尿と排便を必ず分けて訴えられるようになり、放尿が減少した。また、皮膚刺激をしてほしいということも訴えることができるようになった。

⑧健康状態や食欲、排泄に関する行動障害は、詳細な観察が必要であった。服薬による睡眠の安定は、行動障害の減少につながった。

以上述べてきたように、獲得したスキルが増えたこと、何をすればよいのかが理解できたこと、混乱が減少したこと、生理的な問題が部分的に解決したことなどが、行動障害が軽減し、安定している期間が長くなっていくことにつながった。

(5) 本ケースにおける有効な療育要件について

①生育歴や行動障害の状況が情報として必要

である。その情報から行動障害がいつ発生し、なぜ発生してしまっているのかということや、行動障害の強度が推測しやすくなる。

②何度言語指示してもできないことは、いつまで経ってもできないことが多かった。そのため、獲得してほしいスキルをジグなどを利用して伝えたことは、混乱の減少とそのスキルを獲得させるのに有効であった。

③余暇時間の過ごし方を身につけたことは、行動障害を軽減させることに有効であった。内容は、強い関心を示しているもの、壊してしまったらすぐ代わりを用意できるもの、壊れにくく耐久性があるものを使用したことがよかった。

④構造化を図り、絵カードを利用して、スケジュールシステムで日課を伝えていったことは、混乱を減少させることになり有効であった。

⑤行動障害に毅然として対応すると同時に、すべき行動を確実に伝えるようにしたことは、行動障害を効果的に制止することと、その場での適切な行動を伝えるのに有効であった。そのためには、行動障害に代わる適切な行動の獲得が必要であった。

⑥言語面での理解力が乏しいため、言葉で伝えてもほとんどこちらが期待していることが伝わらなかったため、物理的に限定した環境を設定したことは有効であった。

⑦職員は、長期間にわたって対応していかなければならないということも分かっておく必要があった。

⑧行動障害の増減に影響する健康状態や、食事、睡眠、排泄等の生理的状态に関して、チェックリストを作成したことにより適切に把握できた。

⑨本ケースのように様々な面で困難性を有している場合、医療との連携は不可欠であった。

3. 終わりに

非常ベルを一日に何回も鳴らすある自閉症のケースに対して、その原因を愛情不足ではないかとか、鳴らした後他人が騒ぐのを喜んでいるのではないかなど、様々な理由を考えて、非常にやさしく接したり、鳴らしても無視したり、厳しく接してみたりした。しかし、全く改善されることはなかった。ところが、スケジュールシステムで日課を知らせたところ、それ以来非常ベルを鳴らすことはなくなった。

また、あるケースでは、作業時間中に何度もトイレに行くため、泌尿器科にかかったり、作業を拒否しているのではないかということで作業種を変えてみたり、トイレに行くことを厳しく制限したりしたが解決しなかった。そこで、この作業量を行ったらトイレに行けるということカードで示したところ、作業に集中して取り組むようになった。

要するに、彼らは日課のスケジュールが分からなく混乱していることで行動障害を示すことになったり、いつトイレに行けばよいのかが分からなく不安なため、頻繁にトイレに行くことになってしまっていただけではないだろうか。我々は、これらのケース以外にもこのようなことを体験したことで、自閉症の人達に対して、安易な思い込みや独断で接することが、いかに彼らを苦痛な状況にしてしまうかを、TEACCHプログラムを実践することで反省させられた。

我々は、TEACCHプログラムを知り未熟ではあるが取り組んできたことで、入所している人達の障害特性と機能レベル、個性を把握し、彼らが暮らしていくうえで必要な情報を一人一人に理解できる方法で知らせ、できるだけ他人に依存しないで自立して暮らしていけるようにすることの重要性を学ぶことができた。